

的進駐要領を指示（大陸指第七四五号）したが、二十五日午後十時頃受領した南支方面軍佐藤賢了参謀副長が電報をポケットにしまいこみ、護衛海軍の制止を押し切り、二十六日午前四時十分上陸を強行した。怒った海軍部隊は、陸戦協力を停止して沖合に去ってしまった。

また、二十六日朝、軽爆撃機がハイフォンを爆撃する事件が突発して海軍側は直ちに上奏した。このため陸軍省首脳は軍司令官即時更送、爆撃禁止の天命を発令した。この爆撃事件は指揮機の合図誤認したある一機の偶発事故であると判明したが、西原少将は「統帥乱れて信を内外に失ふ」と、六月以来の富永少将一派に対する憤激を発信してよこしたという。

事態の推移を見つめていた米国は、即座に介入措置をとった。即ち、二十五日中国に対する二五〇〇万ドルの追加借款の供与と、翌二十六日すべての鉄鋼類の輸出禁止を發表した。これは、確実に重慶政権を元氣付け、日本の国力達成を阻害する措置となった。

執筆者の所屬した第五師団は、九月二十六日以来ラ

ンソンに集結していたが、大本営は十月一日、南寧―龍州道に沿う地区からの撤退を、十二日、第二十二軍の戦闘序列から除き、大本営直轄として上海付近に転進して上陸作戦の訓練を実施すべきを命じられ、大東亜戦での敵前上陸師団として蘭印その他の作戦に参加するのである。

明号作戦

現役時代を回顧する

石川県 山下 芳雄

とかく軍隊というところは若者にとって人生の墓場であると言われがちであるが、大和魂を修練する道場でもあった。このことは大東亜戦争下の三年間、仏印派遣部隊の現役初年兵としての体験からでた率直な言葉である。

昭和十八年五月十八日、当時の仏領印度支那のサイゴンに上陸した。早速、薪を焚いて走る汽車で二日間

揺られ、着いたコロロは灼熱の炎天であった。やがて新参の我々が苦楽を共にする兵舎に到着、そして中隊の花形、虎の子の軽機関銃班に編入された次第である。班内の最高年次兵は昭和十四年徴集とか、戦闘体験豊富な武者の面々である。軍隊の神様たる古参兵は「予は現在地にあり」の様相で、我々にとっては、威厳そのものであった。古兵のうちには、万年一等兵なるものも少なからずいる（何年いても上等兵に進級しない兵）。後ほどこれらの方々から凄くしごかれ、いじめられたことも、今となれば思い出の語り草である。

いよいよ本格的な軍隊生活が始まり、特業教育は瓦斯兵と決まり、約一カ月の厳しい訓練を受けた。体験された方も多いからご理解いただけると思う。起床と同時に「ガス」防毒面は顔から離れることはなかった。小高い山への早駆けや兵舎一回りの駆け足には、お面かぶつての突撃訓練。やっと面が取れたあげくの果ては、洗面器の中で息を止めての秒読み。終われば催涙ガスの密室に素面で入れられ、手を腰にあてて一分間の号令練習。死に物狂いで出てきたときは涙とよだ

れ、鼻水嘔吐の腐れ顔になった。

一選抜で進級したというものの、決して生易しく喜んでいる場合ではなかった。古年次兵からは特別の目で見られいつも注目の的にされた。中でも先の万年一等兵からは何かにつけて洗脳としごきの制裁を受け、おまけに「ありがとうございます」と不動の姿勢で敬礼。欠礼でもしようものなら上級者（私）に向かつてびんたの連打は常の例。この悪戦苦闘以上の苦さはわが身体に染み込み、永久に忘れることはない。どの隊でもこのような豪傑が軍律に矛盾した行動をとり、自己のうっ憤晴らしをしていたが、初年兵はただ耐えるのみで、内務班の規律はすごく厳しかった。

日夜の演習では中隊長（内藤鉄雄）から猛訓練を受けた。連隊長（故一宮基大佐）の巡察の際、中隊長は緊張感そのもの、声を大にして、兵に向かって「演習止メ」といい、不動の姿勢で抜刀するや現時点の状況報告。「続イテ始メ」の一声で緊張感をほぐしたドラマ的場面的一幕は今も記憶に新しく甦る。炎天下の演習は喉の渇きが著しく、軽機射手ともなれば水筒の水

は絶対空にできなかった。もし敵中放熱筒が焼けた時は、銃器を守る最後の手段としてその水を使えとの教訓で、一滴の水の有り難さ大切さを痛感した。

演習が終わって帰營すれば、早速洗面器をもって堤での水浴、この時だけは心地良く楽しかった。

舎前に置かれた過マンガン酸カリウムの含嗽水でうがいして、早速班内に入れば整頓棚はひっくり返されて荒れ放題、週番上等兵の制裁を受ける暇もなく、班長、班付の巻脚絆をはずし、ひったくるようにして下着を脱がせて洗濯場へ走る。銃の手入れや編み上げ靴の手入れ、整理整頓と次から次へとてんてこまいの忙しさ、故郷に便りを書く暇もなく一日が暮れた。

「新兵サンカワイヤナー」のラップの合図で床につき、楽しい夢路を辿るころに嫌な不寝番だと起こされる。終わって再び床に潜れば、寝つかれないうちにはや起床ラップで起こされる。徒手帯剣で舎前に整列とか、慌てて探せど略帽が無い（古年兵の仕業？）。遅ればせながら仕方なく、鉄かぶとで身を整え、恥ずかしながら最後尾で真面目顔、これぞと待ち構えた内務

係准尉（羽生敏雄）「敵の弾丸が雨あられと飛んでくるぞ」と軍刀先端で突かれた時の痛かったこと、今となれば笑いと涙の物語。班内での出来事は限り無くあるけれど、このほかにもいろいろ体験された方も多いと思う。

表門の歩哨に立ち、連隊長（故・一宮基）の入門となれば司令（下士官）以下全員整列、不動の姿勢で捧げ銃、目迎目送のラップが響くが、やや遠ざかったころ、馬上より横向け姿勢で「敬礼が悪い」との訓練の一声はあまりと言えば哀れである。

また、軍旗歩哨に立哨中一步遅かった捧げ銃、無念や要注意の一声が連隊中の回報に載り、中隊の名譽を汚したと苦汁の難に落涙した。

次に、弾薬庫で暗闇の晩、動哨中に週番司令の巡察があった。直ちに異常の有無の報告をし、歩哨の任務（歩兵操典）は無事合格かと思っただのはぬか喜び。「これより状況を与える。今、目の前にネズミが火をくわえて弾薬倉庫内に入った。数分後に爆発する。歩哨は

直ちにその処置を取れ」。なんと馬鹿げた将校もいたものだと内心では思ったが、即座に答えた「沈着冷静にして水中ポンプを持って追いかけます」と。「続いて動哨せよ」と言い立ち去る司令を見送りながら、無事難を逃れたところでほんとと安堵の胸を撫でた。

夜の動哨は不気味であったけれど、林の彼方から熟れたドリアンの甘い香りが鼻につき、空腹を癒してくれた。夜明けを忘れたかのように、一羽のふくろうが木の枝に止まって、わが物顔で茫然とした姿に、わが心の安らぎを味わった。

出動命令

わが部隊は一号作戦（大陸打通作戦）策応への出動命令を受けて、昭和十九年十一月、南支に進駐した。まずは被服交換から始まる。被服係池田上等兵の出番ともなれば「貴様ら足は靴に合わせ、身体は服に合わせ、地方（一般社会）と違うんだ」と気合を入れられた。結論は、あてがわれた服も靴も体に合わなくとも、そのまま着ろ、履け、文句を言うなということである。やがて完全武装に身を固めると、御国のため精いっ

ぱいに御奉公ができると血湧き肉踊るの心境となる。肩に食い込む軽機関銃の重さに耐えながら、今日も明日もと行軍すること幾百里。

仏印と支那との国境にある「鎮南関」の城壁門を通過したとき、すでに日が暮れていたと思う。麓から吹き上げてくる風は冷たい。夜が白々と明けはじめころ、それぞれ山頂からのろし合図の白い煙が立ち上り、さらに緊張度を深めながら行軍が続く。

某部落へ突っ込んだが既に敵影が無い。さすが敵もさる者、赤ボタン（敵は歩兵第八十三連隊をこのように呼んでいた）の精鋭部隊来襲との情報を得たのか、その日、取る物も取り敢えずに逃げ去ったことが、民家の「日めくり」で分かった。さすが、中国大陸だけにほとんどの家畜は放し飼いで、お陰様で副食には事欠かなかった。

寧明―明江へと進撃の途中にはいろいろな出来事に遭った。その中から二、三の体験談をあげてみる。

まずは軍旗護衛兵として民家の軒下で一夜の無事安泰をお護りしたこと。行軍中に敵の機銃掃射を受けた

こと数回。中でも、先発連絡部隊（軽機含む）として明江へ向かう途中のこと、友軍（光兵団Ⅱ第三十七師団）の約一個中隊から奇襲を受けた。この時は思いがけない事態に吃驚、道案内人が中国人であったためだと思う。事無きを得たことは幸いであった。

また敵に通ずる三叉路地点、分哨勤務についた掩体よんたい壕中で「これがお前の墓穴だ」と言われた時、犬の遠吠えを聞きながら一夜を過ごしたが、身の震えるほどの怖さは今もなお忘れられない。思えば「人間至る処青山在り」であった。

馬上大尉を隊長とする官撫班の一員に加わった。塩と軍票を背負っての強行軍、路傍の電柱には「日本軍歓迎」の赤紙が貼られ、我々の到着を喜び待ちの集落へ入れば、爆竹乱破しての歓迎にわが胸は熱くなった。官撫の要旨は次のとおり。一、日本軍は戦争が目的ではない。二、世界の平和を願って貧しさを助けて人々の交流が本意である。三、決して侵略ではない。」と通訳説得に励んだ。さとうきびを杖代わりにかじりながら、任務遂行に万全を期して再びサイゴンへ引き

返した。

明号作戦の切込隊

時に昭和二十年三月九日、フランス軍のツドモー兵舎攻撃戦に当たっては、芦屋（ツドモー）を拠点として作戦準備が進められた。私は切込隊の一員に選ばされたのである。

戦死された故山下芳雄上等兵（白木の箱の中にご遺骨あり）を前にして、今生の別れと覚悟し「男子の本懐これに過ぎず」との遺言状をしたためた。続いて、今一度戦陣訓の戒「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」、「死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ」を復唱し決意を固めた。

日仏軍も上部では「イエスカノーカ」の交渉が決裂し、まさに午後十時、切込隊は行動を開始、暗闇の中を攻撃目標目指して静かに接近した。まずは仏軍通信所の電話線切断に成功、直ちに軽機の空弾丸で威嚇して保安隊を一掃、続いて領事官邸に切り込んで家族を監禁、その後は軍事機密の探索に邸内を綿密に見回った。家具の多くが電化製品で満たされた超豪邸にはた

ただだ吃驚させられた。やがて夜も白々明けるころ、仏軍兵舎からの降参ラッパが響き、日本軍占領の万歳の声高らかと聞こえた。

ここでしばらく警備を終えて本隊と合流、以後作戦は三月十九日から逃亡・潜伏、仏軍の掃討戦に入った。時は昭和二十年四月十四日、わが中隊はブダンスレー地区の敵を掃討するため、自動貨車に分乗して目的地向かう作戦行動中、所属の第三小隊の車輛が一瞬の間に転覆した。乗車中の自分は軽機を抱いたまま断崖下に転落し、重量物の下敷きとなって重傷を負った。しかし、軽機に何等の故障もなかったことは不幸中の幸いというべきか。

負傷のため戦線を離れ、サイゴン病院で治療を受けもっぱら回復に努めていたところ、八月十五日の終戦を迎えた。

以上が、記憶を辿りながら、自分が歩んだ軍隊生活の体験談と戦闘記録の概略である。これにより、待ちに待った復員船の来るまでの間、いろいろな出来事とさまざまな思い出があったが、戦勝国軍（敵）の、我々

に対する態度、処置に、忍び難きを忍び、耐え難きを耐え歩んだ苦難の道は、遠い昔の語り草としている次第である。川の流れて身を任せなければならなかった時代は、時を待たずに過ぎ去って五十年、その間には敵の情に感じたこともあったし、敗戦の悲惨さを身をもって痛感したこともあった。

しかし、最後に一言を加えるならば、青春時代の真ん中に、打たれて叩かれて鍛え上げた銘刀とまではいかなかったけれど、私も、我々も、そろそろ「焼き戻し、入れ直し」の限界にきているのではなからうか！でも、身体の何処かに今なお小さな「焼魂」が宿っているような気がする。

【解 説】

体験記執筆者山下芳雄氏の所属部隊は第二十一師団（師団長 陸軍中将三國直福）歩兵第八十三連隊（連隊長 陸軍大佐一宮基）である。

一号策応作戦

湘桂、粵漢及び南部京漢鉄道沿線の要域を確保し、

敵空軍基地を覆滅し、敵機の跳梁を封殺する目的をもって、昭和十九年五月開始された支那派遣軍の一号作戦は北支から逐次中支（河南作戦）・南支に及び、十一月には桂林・柳州地区を攻略（湘桂作戦Ⅱ湘―湖南支、桂―広西省）し、本作戦の当初の構想であった南方圏との連絡可能な距離に到達した（インド支那国境から約五〇〇キロ）。

これより先、昭和十九年四月、南方軍から一号作戦策応に関する内示を受けた仏印駐屯軍は、第二十一師団にその準備を命じていたが、十一月その実行に関する命令を受領した。

軍は直ちに第二十一師団に歩兵一個連隊、砲兵一個大隊を基幹とする一支隊（支隊長歩兵第八十三連隊長一宮基大佐・一宮支隊と命名）を編成させ、ランソン付近に集結、すみやかに南寧付近を占領して第六方面軍の作戦を容易にするとともに、南寧―ランソン道を確保し、現に南支で作戦中の第三十七師団（作戦時秘匿名―光）及び第二十二師団（原）の仏印転用を容易にすることを命じた。

支隊は十一月二十八日、国境を越えて前進するべき師団命令を受領し、愛店―明江道に向かって前進した。途中大なる抵抗なく、十一月二日支隊主力は明江に入った。支隊長は第三十七師団（師団長中将佐藤賢了）が既に南寧を占領したとの情報を得て、兵力一個中隊を基幹とする挺進隊を編成、急進を命じた。

同挺進隊は十二月十日、浚淥において第三十七師団の先頭部隊と連絡し、支那派遣軍と南方軍の地上交通連絡が啓発されたのである。

ランソン―南寧間の道路は中国軍により破壊、荒廃はなほだしく、支隊は全力をあげてその整備に務め、昭和二十年一月中旬これを概成した。一月十七日、一宮支隊は第三十七の部隊と交替して仏印内に撤退を命ぜられ、支隊の編成を解かれた。